

映画の小箱

革命が起き、侵略が始まる1930年代の上海。そこに生きる男たちの権力抗争と、女性への恋を激しく描く。

『上海グランド』 激動の中国に生きる 男たちの野望、恋

金丸弘美=文
text by Hiromi Kanamaru



一九三〇年代の上海を舞台に、運命の女神が結び付けたかのような、男と男、男と女の出会い。それは、本人たちが望んだのか、それともあらかじめ、決まった見えない糸が結びつけていたのか。あたかもシグソープズルのように組み合わせられていく。

劇的で華麗で美しく、はかない。一瞬に燃え尽きるような、野望と恋と命運。それは激しければ激しいほど、鮮烈な華を放つ火花のように輝いて見える。激動の歴史の一コマに咲いた、苛烈で、しかしどこにも残らない、青春を一所懸命走り抜けた主人公たち。彼らの一途さと、クライマックスへとひた走る速度が速ければ速いほど、大きなカタルシスを生み出す。

ホイ・マンキョン（レスリー・チャン）は、抗日運動のメンバー。当時、日本による中国台湾への侵略に対して、各地で抗日運動が行われていた。ホイは船に、仲間とともに囚われの身となっていて、拷問を受ける。だが一

瞬の隙をついて脱出したホイは、嵐の中、海へ飛び込み、上海の港にたどり着いた。

ホイを助けたのは、上海で苦力（クーリー、荷物運びの労働者）として生活をするリック（ティン・ラウ）である。もっともリックはホイを助けたといっても同情からではない。自分の手下として扱おうと仲間のところへ連れていったのだ。

リックは今も苦力だが、やがて上海の写真館に自分のタキシード姿が飾られるような権力者にのし上がりたいと思っていた。そしてリックが密かに思いを寄せていたのが、上海の権力者の一人ファン（シン・ヒンゴツ）の娘ティンティン（ニン・チン）である。

リックはティンティンが、いつも車で映画館に行くことを知っていて、待ち受けては映画に誘うのだが、相手にされない。ところがあるとき、ティンティンが彼女の父ファンと対立するウイン一家の手下に路上で襲われ、連れ去られる事件が起こる。リックはティンティ



ンを誘拐した車を一人で追い、彼女を助けた。こうしてリックはファンの家と呼ばれ、念願のティンティンに一步近づくことになる。

ところがリックの行動を知ったウインは怒り、リックが母と仲間とで住んでいる建物を焼き払った。このときリックの母を火災の中から救ったのは、ホイだった。リックはホイに尊敬をあらわし、急速に親しくなる。そしてリックはホイを伴って、真つ正面からウインの住処に殴り込み、ウインを葬り去った。

リックとホイの命は、ウインの部下に狙われることになる。そこへ手を差し伸べたのが、ティンティンの父ファンだった。リックとホイは、ファンの後ろ楯によって、裏社会での上がつていくことになる。

リックはタキシードも手に入れ、ティンティ

ンとのデートの夢も叶った。あとは彼女にプロポーズするだけだ。

しかし、派手な暮らしのリックとホイの前に、新たな運命が顔を出し始める。

ファンは、急速に力をつけはじめたリックに警戒をし始めた。

一方、ティンティンは、ホイが、対日抗争の中、日本軍に追われ逃亡していたときに、二人は決定的な出会いをしていた過去があった。ホイはティンティンと再会を果たす。

また、ホイの存在は、対日抗争をしていた同志の間に知れ渡り、ホイは裏切り者と責められる。ホイは仲間を殺した相手を倒すことを同志に誓い、復讐にのりだす。そこに待ち受けるのは、苛烈な出来事だった。

中国の開港都市上海の激動の時代。これまで長く続いた専制国家の清朝の時代が終焉を告げ、革命が起こる。イギリスは上海に居留地である租界を築く。かたや日本の侵略なども始まる。旧体制から、革命、他国の侵入、共産主義、戦争、抗争、近代化と、あらゆるものが混在し、またさまざまな思想や近代工業、文化などが、一気に入ってくる時代でもある。

東洋一と言われた上海は、近代的なビルも立ち並び、あらゆる人々が流れ込む。その当時のビルや衣装や車など、映画に登場するすべてが見事に調和して、いま見てもモダン。それだけでも存分に楽しめてしまう。

ここで起こる主人公たちのドラマは、まるでかつての日本の時代劇のような優雅さや、メロドラマチックな俗な面や、アメリカのギャンブル映画のようなアウトローのはかなさと激しさも持ち合わせ、それが見事に調和して、香港スタイルになっているのが素敵だ。

『上海グランド』

(香港) 新上海灘

監督=ブーン・マッキット

出演=アンディ・ラウ/レスリー・チャン/ニン・チン/ン・ヒンゴツ/アマンダ・リー

配給=東光徳間/ツイン

シネマスクエアとうきゅうにて春休みロードショー